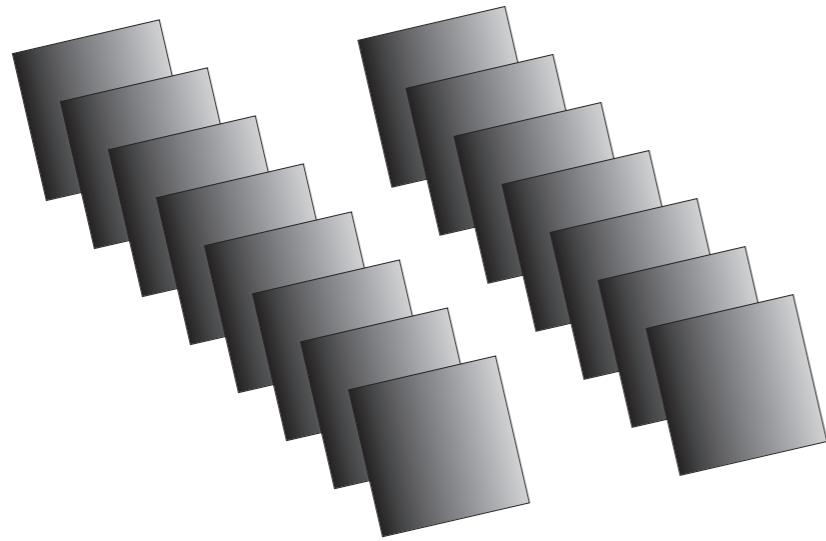

月 刊

MéLange

Vol.128



2017.11.26

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.128 2017.11.26

「月刊めらんど」編集部

詩・俳句

軒下／出火 ……………中嶋康雄 03

独秋詠（俳句） ……………岩脇リーベル豊美 04

きざし（俳句） ……………安西佐有理 05

薄明／バス停 ……………高谷和幸 06

なぶられ ……………大橋愛由等 07

洗面所（HOME 連作） ……………大西隆志 08

天地さかさまの謎……………富岡和秀 09

くもった目／夜間斥候／きれいな瞳 ……………北岡武司 10

記憶の森 ……………高木敏克 12

草の庭 ……………木澤 豊 13

評論・神戸から島尾敏雄を問う

島尾敏雄の〈行き違い〉……………高木敏克 14

連載／エッセイ

神戸詞あしび117「句会苦手な私が句会の事務局を担当した」……………大橋愛由等 20

編集部日より★47／「月刊めらんじゅ」2017年に定期発行する最後の号をお届けします（あと1冊、年末に島尾敏雄生誕百年追悼記念号の別冊を発行します）。まだ年の暮れまで1か月あまり残っていますが、今年のリフレインをしてみたいと思っています。5月26日「月刊めらんじゅ」詩友の富哲世氏が逝去。寺岡良信氏について「Mélange」月例会にとって重要な詩友をなくしました。この二人が抜けた穴は大きくその代わりになる人物はいません。ふたりともまだ60歳代。医療が発達して70歳代でも元気に表現活動をしている人が多いなかで、重篤な病いにかかっていたとはいえ、その死は早いものでした。特に富氏のするどい詩評はいまでも耳奥にしつかりとこびりついています。ほんとに惜しい人をなくしました。富、寺岡両氏という宝のような詩友をなくしてその喪失感を、詩友たちは心のなかで共苦していると思います。それでも「Mélange」月例会は回を重ねていき、構成メンバーをすこしずつ変えて続いています。われわれにとっての生は、毎月の詩の会を催すことであり、故人を追慕しつつ、あらたな詩業を重ねていくことなのです。そして来年も詩業を重ねていくことでしょう。（大橋記）

◆軒下

中嶋 康雄

軒下で立ち止まる
遺体を見ている
これからはなにかが変わってしまう
これからは
トンボが空でいつまでもまわっている
井戸はいつからか涸れている
ふたはだんだん朽ち果てる
もうすぐ行ってしまふ
なにかもが行ってしまふ
残るものはなにもない
大きな魚が中空に浮かび
刺身に切れてゆくのに
「わしは肉が好きだ」
と言うと
刺身が魚に戻り
尾鰭を振って潜ってしまう
トンボが空でいつまでもまわっている
赤いやつを割り箸ではさんで
口にねじ込むと
パリパリといい音がする
見たことも会ったこともない
古い影も一緒にパリパリやっている
そろそろ酒が欲しいので
一緒に台所に忍びこむと
肉の佃煮がある
「今は閉店してしまつたあの肉屋の佃煮だ」
ドストスンと牛が肉を落して歩く
牛について行けば

佃煮がいくらでも食える
酒は古いもなにも関係ないが
古い影が佃煮には目を白黒させている
「牛を食うのか」
「食う」
食おう」
一緒に佃煮を食い酒を飲む
天井の槍をとり舞う
手拍子
足拍子
土も鬼も錆びた赤いミニカーに乗ってきて舞う
輪になり舞う
羊歯を振り
羊歯をたたく
羊歯から胞子が舞う
久しぶりに井戸のふたが開いている
いもりが欠伸をしている
雨戸にひつつき
やもりも笑っている
笑う大きな口から
奥から
もつと古いのも出てくる
一緒に佃煮を食い酒を飲む
行こう
行こう

◆出火

中嶋 康雄

尻が燦然と輝いている

糞尿に塗れた尻はお客様だ
巨大な回転軸が高速で回転している
回転は瞬時でも止まらない
尊大な溶液がふりかけられて
消臭されて出荷されてゆく
犬がトラックに轢かれて死んでいる
真つ黒な蝗の雲が覆い尽くすトイレには
トイレレットペーパーがあり
火の車のように回転している
尻を出す人々が拝んでいる
不眠不休の作業員は
機械に巻き込まれてしまえば
ありふれた神様になるだけで
その横で皮膚病の犬が葉巻を燻らしている
尻が拭き取られ
拭き取られるとまた年金が少なくなる
轢かれた犬は内臓と涎を垂らす
グループデイスカッションを繰り返すと
人より親和性があり
採用される度に
社歌が鳴り響く
「トイレットペーパーは真正だ」
リフレインが永遠に続き
火事が社屋を埋め尽くす
決算報告がされている
「尻がある限り黒字です」
コトコトと後ろで無が濾過されて
垂れ下がっている
社屋はもう不要かもしれない
尻さえあれば

◆ 独秋詠

岩脇リーベル豊美

ウサギ渡る浅瀬の飛沫冬支度

溪流や居場所追われた貝の形見

羊食む青くさ死人花に透けて

第三帝国書体が防空壕と書く壁

狂おしい情愛詠みたし淡水魚

見飽きぬ火国王はOTになる海神

烈火の夢浮橋にかかる火の粉浴び

桐落ち葉茫と不意打ちに顔をあげ

無月夜や運河が知覚する鈍痛

蒼い桐の花咲き結び目ほどく

桐の実の木漏れ日重力にたわわなり

露西亞大公女に謁見霧降る夜

神楽巫女が桐の鈴搔き鳴らす日の暮れ

◆ きざし

安西佐有理

刈るものは首さえもなし川渡る
Nothing to reap
even a head:
I just cross the river

研げぬ刃で捌いておいた既往歴
An anamnesis
has been dressed
by the unsharpenable knife

Been there, done that など深さ測る真空
Those been-there-done-that's
to sound a depth
of total *sunyata*

くろぐろと群がるものありヤツデ咲く
Something black
swarms about
fatsia in bloom

亡国のきざし賑わう年の暮れ
The signs of national ruin
look festive
the end of the year

◆ 薄明

高谷和幸

川沿いの道を歩いた
川沿いであること
歩いたことを
追い越していく車がある
わたしは車の詳細がわからない
目は薄暗い
薄暗くなつていく 道
顔の前面には
わたしには
目だろうと思うところ
ひかりがくぼんでいる
あつめるおもいがあるのだろう
黒い車が追い越していく
車には
亡くなった友人が乗っている
一人、二人、三人
薄暗いままの川沿いの道
砂の上に図形を描くように

◆ バス停

高谷和幸

わたしの泣く子ははぎとられてふさがれ
ささいなものがちがいさきつてさきくれ
地図は昆のきたないおびたびたとおび
かむるものの時刻表のひかれたしめりに
やられて泣くうちに見失った彼の「亡霊」
なすむ時計の首を泣く子らは順に算える
こよみは石くれる「時の迷宮」の始まり
の朝を問いの問いへと乗り換え積み上げ
その上に泣く子の手の陰影が顔をおおい
待つている闇に石筍が育つていくように
生き返りの子かもやう裂け目にあらわれ
かかりのよこたわれる動物の内部に入る
幻の相互励起した下半身が馬のバス停に
たぎりの名辞（シフター）に手をひかれ
グーグルの路線図を彼の「生物」が迷う

◆ なぶられ

大橋愛由等

溶け始めた哲理は川筋にむかう
（ゆつくりとそのままの姿勢を求められるがいつのまにか実
在が失われ川向うに行くための橋までたどり着くまでに冬雲
の乖離がはなはだしくなつて手持ちの詩語もなくなりかけて
いたところにワタシの背面をなぶつて通り越した風たちが「そ
ろそろそろそろだ」と言い合っているのを聴くとはなしに聴
いていると土手の下に真つ赤な自転車に乗った俳人が「僕は
新聞なんてよまないぞ」とセイタカアワダチソウに向かつて
くどくど説論している光景を今日は愉快だと思うワタシにワ
タシは気付いていた。「在るものは在るのだから」とスポーツ
面から経済面に新聞紙をめくる音をたてていると「その音が
實在なんだとしたら」と語りかけようとしている朝の机には
二人の祖父の箴言が転がっていないことを知って塩壺のなか
に隠れてしまったのだろうとか新聞に食べられてしまった
のだからとかボカディージョをかじりながら「そうなるよセ
イタカアワダチソウの哲理はどうなつてしまうのだろう」と
付け足したりしているワタシ。やはり川向うに渡るには詩の
一篇を書くよりは遠回りしてでも橋のある場所まで歩いてい
くのがへ在ることなんだと充分に分かっているつもりでも祖
父たちの箴言がひよつとしたら今読書している短編小説集
『カメラが街角で哭いているとしたらそれは剽窃だ』に挟み込
まれて栞になつてしまっているのかもしれないと心配してい
るワタシの横で昨日訪ねてきた石が遺していった「蒼蒼」とい
う言葉を噛み砕こうとしているもう一人のワタシ。

◆洗面所 (HOME 連作)

大西隆志

手に固形石鹸を取り
 水平線に浮かぶ雲を生みだす
 水栓からは水が落ちていて
 一筋の流れに手を差し入れるのか
 鏡のなかで二の足を踏んで
 朝の始まりから遅れているようだ
 お湯はまだとどかない
 顔の脂肪を洗い落とせない
 口がすずげない
 数秒ごとに髭がのびる
 数分ごとに株価が上下する
 温かくなる掌に
 発見された抜髪が洗面陶器の縁から
 すべり落ちていく

気泡が目と鼻と口を隠し
 耳は開いたまま、穴へ差し込まれる花
 つらい言葉の落葉を

横目で見ていたぼくは
 コップの底の水垢と歯ブラシ、チューブから
 捻り出される欲望の喫水線にこびりつく
 貝殻のような日々の亀裂にそわせていたのか
 タオルで拭き取るのは
 ミュンヘンでの茂吉さんの一首
 夜が更けて陰の白毛を切り捨ててからの時間
 洗面器にはたつぷりの湯
 一日一日が更新されるのかしら
 脱衣籠に脱ぎ捨ててある
 皮膚や骨を拾い
 洗濯機に放り込むしかないのか
 換気扇が変な唸りを上げ
 ドライヤーの熱風が
 止まらなくなる

◆天地さかさまの謎

富岡和秀

1
 橋の下には川が流れ、兩岸からは緑色の多様な形の葉を繁茂させた樹木が川面におおいかぶさる様を見せている。私の意識はその光景を眺め秋の息吹を感じる。空を見上げると、群青のなかにところどころ雲がうかび、のどかさすら感じる。

何気なく欄干に両手をのせて川面を見ていると、そこは群青の空であり、まだらの雲が灰白色をとどころに從わせている。空を見上げると、上空には、川面で樹木が兩岸からおおっている光景がある。驚いてもう一度下を見下ろす。澄んだ川に空模様が映っているのだろうかと思ってみると、眼をこすり、確かに青空と雲が橋の下に広がって水は一滴も存在しない。私の意識は驚倒を抑えることができな。意識の混乱を抑えるために、この天地さかさまの現象を疑いをもって認識しようとする。だがいくばくかの時を経てこのさかさま現象に変化がない。欄干から下を見れば底は空であり、上を見上げれば天には川が樹木を従え水をたたえて流れているという現象に変化がない。

私は自己意識を懐疑によって確認するという行為を繰り返す。Cogitoは疑いようがない。しかも私は「今、ここ」にいる。今ここで空と川のさかさまの光景を見ている。蝶が夢か今の生存が夢か。蝶のほうが実在を感じさせると古説にも聞くが、私は天には川を見つめ、欄干の下に川底ならぬ空の底を凝視しながら、Cogitoを解体することによってこの天地さかさまの原因を探究する方法がないかと思案する。欄干に両手を置きながら凝視と黙想を繰り返しながら、これは自己意識のなかにある幻想志向による「錯視」の可能性があるのだと、まず思う。またこの天地のさかさま現象は私の意識のなかにある意識せざる願望の現われであるかもしれない。これならつじつまが合う。しかし、自己意識自身は合理的にできており、「錯視」の可能性はないと断定できる。さらに仮説的に思考してみる。

これは夢ではないのである。白昼夢でもない。では想像力によってこの「逆様」の現象が見えているのか。想像力による光景とするならば、それは超現実の願望や幻想願望と同断である。天才ダリにせよ、鬼才エルンストにせよ、異才ガウディにせよ、彼らの描いた幻想絵画も、サグラダファミリアの幻想的な建築も、天才達の脳髓に由来する幻想志向から絞り出された生成の果実である。想像の果実もCogitoの範疇のうちにあるといえる。私は欄干のそばにいて、唯一人、凝然と立ち尽くす。

日が暮れると、闇があたりを占め、私も闇の中に埋もれる。橋の下には何も見えず、闇がひしめいている。天を流れる川だけが水のきらめきを、時おりきらめかせる。宇宙のいずこからか、川の流水に光を与えているので、そのきらめきが見えるのだろう。その時、Cogitoは今や闇のなかで天の川という外界しか見えない事実を認めながらも、その外界がなくとも、Cogitoが確かに存在し、闇に囲繞されることよってCogitoの存在を確証する。今や天の川のきらめきも消え、真の闇のなかでCogitoが闇のなかのCogito存在の唯一性と根幹性を立証する。

2
 しかし、と脳内のもうひとつの声がこの闇の中から、膨大な不安が異常に増大し幻聴のような声として聴こえる。ダリもエルンストも超現実の幻想絵画を描きだしたときには、脳内の無意識からCogitoへ想像を移行したのではないか。「幻想の描きだし」という初発の想像が生成しはじめた途端に無意識は、Cogitoに変化するのであろう、と私は闇のなかで橋を渡りながら思う。Je pense, donc je suisとつぶやきながら、そのつぶやきの生まれる直前に私も無意識からの橋梁を渡ってつぶやきを発したのだ。天の川で水のきらめきが消えた今、天も闇、橋の下も闇、世界は全くの闇となり、そのなかでゆっくりと欄干を伝いながら橋を渡る。闇のなかをゆっくり歩きながら、天地のさかさまが「錯視」によるものではないという判断中止的な理由を自分に与え、更に何もも生成しないままの「無意識」が天地さかさまの現象を生みだしたと、仮の答えを自分に与える。それは脳内にある空無の代償でもあるからCogitoの一環であるのかもしれないと思いつながら。

だが、脳内の無意識が実在か、空無が実在か、天地さかさま現象が実在か、考え始めたとき、闇をあゆむ私は転落する。川底へ、いや空の底へ転落する。転落場所は定かではない。そのとき、転落しながら、背後に豹の眼のような二つの眼球の強い視線を感じる。底へ落着いたとき、いくばくか離れた場所で、樹木のように佇立したものが、その強い眼差しに射られたためか、同時に落雷のような大音響と一瞬の光が発生した。それによって、佇立した樹木のようなものは燃え上がり、その炎の柱は天の川近くまで達して、一時間ばかりで燃え尽きる。燃え尽きたのち、その場はあまたの灰だけとなる。その間、転倒したままの私は燃える炎の明かりで周囲を見ることができたのだが、燃え上がるものその他は、真の闇に変わりはない。灰の上に立ち上がったとき私は、その燃えたものは、私という存在者で、かつはCogitoの代替として「灰化した空無」になったのだと思えた。であればこそ、背後に感じた豹のような二つの視線の強さは私自身の無意識のなから湧いたものと、確かに、覚醒して同定することが可能であった。あの二つの眼差しは無意識のうちからの眼差しで、樹木の「灰」は樹木自身の死の痕跡であると同時に、その痕跡と入れ替わりに、Cogito自身も燃えながら覚醒し、「無意識」と名付けられるものから、更に広がる未知の世界へ旅立つために、羅針盤として二つの強い光を発する視線を覚醒のなかで獲得したのである。

灰化のもたらした必然として獲得した二つの眼球は勿論この世ならぬ様相をたたえている。右の眼は淡い緑色を発し、左の眼は淡い赤色を発しているのである。眼球の中央には直径二ミリばかりの黄金色の円の瞳が視線の源として鎮座している。その異様な両眼が「無意識」と言われる夢境につながる。そして世界で唯一人しかない私という存在者の根によこたわる。「統合されなければ失調に陥る私という唯一性」、その唯一性なる私の無意識の根に二つの眼差しは狂気を秘めて物言わずに存在するのである。闇のなかを異様な二つの眼球の眼差しはかなりの物的かつ心的遠方まで透視することができる。しかし闇の世界のなかで、「統合されずに失調したもの」のように、天地さかさまの謎は残されたままであるが。

◆くもつた目

北岡武司

あら あら あら 阿頼耶識^{あらいやしき}えきから
ずいぶんと離れたこと 鏡がくもつて
顔も姿もみえない

(鏡は毎日磨きなさい よくみえるように)

あんなところに
キャリーに赤ちゃんを放たらかして
ママはのんびり優先座席に座っている

(嫉妬心がわきあがったのか)

あら あら あれじゃ連結部の通路を
通れないではないですか
わたしは正義 正義の味方よ

(この世の正義はすべてエゴからくる)

心は正義を呟く わたしの呟きは正義だけ
決めたわ あそこを通って前の車両に行くのよ
だって 正しいことは正しいのよ

(「一引く一は零」は正しいとされるが)

あら あら 阿頼耶識^{あらいやしき}から
ずいぶんと離れたこと 脚が急に元気になったわ
キャリーを飛び越さんばかりにまたいで

(離れば離れるほど鏡はくもる)

飛び越しぎわに思いぎり高い声で叫んだの
「こんなところに置いてたら邪魔でしょう!」
わたしは正義 正義は勝ち誇るもの

(正義はすべて愚かなもの)

あら あら あら お母さん真つ赤になって
キャリーをドア脇に移したわ
どう? 正義がひとつ実現したのよ

(自由の行使が災いをもたらしたただけだ)

それにしても阿頼耶識^{あらいやしき}えきから
遠くすぎたみたい 鏡にピッチがこびりついて
わたし 真つ黒にみえるわ

(ならば磨け そして駅に戻れ)

さあ 延々とマインド・トークに浸り
不毛な時を生きましよう
人生に実りはないのよ

(実りなき人生などない 祈れ)

◆夜間斥候

北岡武司

雪原はあかるく広がり

青みをおびた夜空は星を宿す
星は溢れかえり鋭く輝く

ハルビン郊外の雪原

月が見おろしている

黒い影がいくつか前方で動き
わが部隊は匍匐前進

硬く乾いた雪のうえに腹ぼう

◆きれいな瞳

北岡武司

雪小鹿は全速力で逃げる

軽く軽く軽く駆ける

後ろ脚が地面から高くあがる

豹は全速力で追いかける

最後のダッシュで

小鹿の首筋に喰いつく

首筋を豹に銜えられても

目は優しく潤んでいる

小鹿よ

痛くないのか

怖くないのか

恨みや悲しみは

ないのか

枝の隙間に見える空が

この世のすべて

目はすべてを愛おしむ

悲しいとも

痛いとも

無念とも思わず

豹をもうらまず

きれいな瞳で

木の枝と空を見ている

横には
銃を支え雪原に転がる戦友たち
前には
やはり銃を構えた敵兵
かれらにも おなじものから
おなじ使命が与えられている
月が雲に隠れ 辺りは急に暗くなる
この世を往ききれだろうか

◆ 記憶の森

高木敏克

☆
森の鳥たちは朝からけたたましく縄張り争いの声をあげているね。それなのにぼくの耳にはそれがとても美しい声に聞こえるのはなぜだろう。森の記憶がよみがえるのは森の現実が記憶をよびさせているからだ。いわば、森は鳥たちの脳、記憶は森の中にある。

鳥の意識は記憶に接することなく現実そのものに接している。もしこの現実が現れなかったら死者の記憶もそのようにして消えてゆくのだろうか。現実を記憶に置き換えない鳥たちは死者も思い出さないだろう。あなたの現実を失った私も少しは死を知らぬ悲しい鳥に近づいたのだろうか。

☆

あの丘の森は人間の脳の形をしているわ。鳥たちは自然の森の中に記憶をもつので、森の中で考えることができるのよ。あの鳥たちは、あんなに小さな頭なのに本当に何でもよくおぼえているわ。だから、南の島から渡つてきても、シベリアの大陸から渡つてきても、迷子にもならず去年来た森の同じ木に戻ってくるのよ。ここで見ていたらそれがよくわかるわ。動物はね、自然の中

に記憶をもっているのよ。自然の中で何かと再会するとその何かを思い出す。でも、人間は大腦の中に記憶をもっているのよ、再会しない人のことを何時までも覚えていたのよ。このことが人間だけの悲しみの始まりね。

☆

その人に会わない限りその人を思い出さないのなら、僕は悲しい鳥になりたい。記憶の脳なんていらぬ。記憶の森だけがあれがいい。誰だつて森の中に記憶をもっていて、森に入ると色々なことを思い出す。一人の人に会えば色んな人のことまで思い出す。記憶は森にある。想念が羽ばたくと、森の中から数羽の小鳥が激しく鳴きはじめた。

静かに考えて森に入らなければ鳥たちは逃げる。朝がたの君は様々な鳥の声に満たされている。

☆

夜になると欲望に身を躍らせて猪たちが闇の中からやつてくる。土の匂いを嗅ぎながら鼻の先で芝を掘りかえしながらやつてくる。そのため森のなかの小さな畑と果樹園を守るために金網が張り巡らされていたが、それは頭を閉じ込める籠に見える。

森に入った僕は、猪がミミズを食べるために掘り起こした後に躓いた。森が開け、空が見えてきた。森の中が明るく傾き、巨大なドームが僕を待っていた。

記憶の森のドームよ、鳥はどこに消えた。

◆ 草の庭

木澤豊

思ひあてる

雑草のなかに 朽ちた水車が あった
茫々 草
ひとつひとつには
名前があった

夕焼けの坂道にならぶ廃屋ごとに
表札の文字が やつと読めた
窓は隙間だらけ
夕空いちめんに電線の網が絡まり
海鳴りが 細い急坂を流れ上がった

いや だれにも聞こえていない
と 女はおもった
それで ネギとこんにやくを買った

それで 坂を上ったり降りたりした
駆け下る坂は切れている
と知っていた

遠くで
大きな墓の上に
新しい町が どんどん建つていく

この町では
閉めるの 開けるの
海の扉がぎいぎい
鳴って

赤い空に
石の鳥
ひとつ
投げた者がいた

関を越えて
重い 当て

▼神戸から島尾敏雄を問い直す

島尾敏雄の〈行き違い〉

高木敏克

島尾敏雄は私小説の作家として語られることが多く、そのために作品の内容については様々な現場調査や現認報告書のような評論が発表されている。しかし、神戸からの視点で島尾敏雄を読むと彼はやはり小説家であり決してノンフィクション作家ではない。つまり、彼は作品を事実にもとづく話として読んでほしいのではなく、虚構として読んでもらうことを意図して書いていたことが分かる。作品を作品として読んでもらうことを前提に作家は小説を書いているがその意図に反してフィクションをノンフィクションとして読むという傾向が出てきたのは文学の衰退そのものと思える。もし作品を総て事実として読まれるのなら誰も小説なんて書けなくなる。犯罪じゃあるまいし私生活をそこまで暴く権利なんて誰にもないと思う。

一九二五年の八歳から一九歳までの多感な少年時代と一九四五年の二八歳から三五歳までの小説家としての完成期間を彼は神戸で過ごしている。この期間に書かれたことはすべて神戸のことだということではない。そのように思う人がいれば、その人は小説の読めない人だ。彼独特の夢のような小説世界は神戸的な世界だ。その世界は神戸的な世界というのは土着風景ではなく幻想的風景であり、あえて神戸の土着とは何かと聞かれれば、それは虚構だと言いたい。神戸とは虚構の町なの

記を読ませて現実を虚構に持ち込む。そして小説を読ませて虚構を現実

実に持ち込む。
もし、小都会の神戸で書き続けていたらその後の島尾敏雄は別の生き方をしたであろう。虚構と現実のバランスは保たれて小市民的な生活は続いたはずである。大都会では私生活を私小説に売り渡さなければ生活できなくなったみたいだ。島尾夫婦は共謀して私生活を悪魔に売り渡すことを決めたのである。それは、単純に私生活を私小説に書き写したのではない。私生活に見える虚構を構築したのである。その意味で彼は偉大な作家である。それでは、島尾敏雄の世界に入っただけでこれは半分が現実で半分が虚構なのか？一〇〇%の虚構なのか？疑問を持ちつつ、神戸時代にいたる幻想のきっかけのようなものを少し追ってみたいと思います。

吉本隆明はその著作「島尾敏雄」の中で島尾敏雄の書く理由について〈異和〉だという。

島尾敏雄が長崎の南山手大浦天主堂の下の Cliff House に住んでいたところに書いた「原っぱ」という初期作品には青酸っぱい思いをかみしめるものがある。普通の少年が友達と遊んでいて、思わぬ心の行き違い



神戸文学館で語る高木敏克氏

に出会うことがある。これは未来の小説家でもなくどこにでもある話である。

あこがれの少女房枝が縄跳びをしていて櫛を落とす。貫太郎は「持って」といわれて飛びあがるように喜んで櫛を持ち、手を洗いに帰って櫛も洗ってくる少女はすでに場所を

だから。そのような虚構の世界は一九五二年から一九五五年までの東京時代に持ち越されるが、その期間の作品は一旦私小説的に傾いた作風を幻想的な作風に切り替えている。その後の作品は私小説に見せかけた幻想小説として私は読むべきだと思う。そのような神戸的な仕掛けが島尾敏雄も島尾ミホも好きなのだ。

神戸から見た島尾敏雄世界はすべて虚構に見えてくる。しかし小説家はそれでよいのだ。犯罪者じゃあるまいし、調書を取る権利なんて誰にもない。ノンフィクション的な解釈は作品と作家を冒瀆しているように見える。地方からの視点はすべて偏見である。神戸地方からの視点も東京地方からの視点も奄美地方からの視点もすべて偏見である。このような条件からすると、島尾敏雄は神戸人にいわせればこうだ。島尾敏雄が最終的に奄美に移ったのは、彼が書いた小説がフィクションの作品として読まれるのではなくノンフィクションの作品として読まれはじめたからである。

大都会での生活は私生活としては大失敗かもしれないが小説家としては大成功である。その一生をかけて構築した虚構の私生活を隠し通せたことは小説家としての島尾敏雄の手柄であるが、彼には私生活の部屋の現実が狭すぎた。どんどんと私生活は浸食されて居場所はなくなつてゆくからである。実に大都会は恐ろしいところである。そうなる非生活空間としての小説世界が生活空間としての家庭生活も人間関係も浸食することになる。

彼はついに現実を取り戻すために虚構以前の現実の世界に戻ることにした。それがかつての生死の現実の世界の南方諸島であろう。彼は狭苦しく空も海も山もない一部屋世界の大都会から出て空と海と山のそして人間の現実を奪還することにした。そうすることによって小説という商品に奪い取られた現実を取り戻せるからである。彼の作品世界は小都会の神戸で生まれたが、東京に移った私生活のような作品は修羅場と化し、東京の作品生活は三年しか持たなかった。これは島尾の戦場を南の島から東京に持ち込んだようにも見える。結果的には南の島の戦場と同様の行き違いの修羅場を東京でも経験できたからである。しかし、今度の修羅場は虚構の中に投げ込まれた現実である。作家は日

移している。少女は櫛を洗ってもらったことなど知らずに「何してたの、貫ちゃん、嫌よ人の物を持って何処かへいっちゃ」とがめる。遊びに慣れた少年なら「ちがうよ、房枝ちゃん。土がついてたから洗って来てたんだよ」「ありがとう、貫ちゃん」で、心の行き違いは解消されるはずである。あるいは、心の行き違いに気付かないまま通り過ぎてしまう。

吉本隆明はこの作品について、「それにもかかわらず〈関係〉の〈異和〉はどうしようもなく少年と少女のあいだにおとずれるのだ」という。さらに、「人間と人間の〈関係〉のなかで、傷つくのはいつもより多くの心をあたえたほうだ。またよりおおく〈関係〉の意識の強度を体験したものだ。(中略)しかし、いつまでも人間と人間の〈関係〉になれることができない〈資質〉があるとすれば、その〈資質〉は、つねに、そして時を経るにつれて、ますます深く傷つかなければならない」

その〈資質〉とはどういうことなのか？あるいはどういうものであるのか？貫ちゃんの場合にはこの行き違いは違和感となつて何時までも残る。時の流れの中での単なる行き違いが〈異和〉という固定されたものとなつて残り何時までも消えない、と吉本はいう。この〈資質〉はいままでもなく島尾敏雄の〈資質〉のことである。「このところを〈異和〉というものとしてとらえるか、〈行き違い〉ということととらえるかは大きな分かれ道だと思える。」

おそらく、吉本の評論的な視点では〈異和〉という〈もの〉として見えるものも、島尾の小説家的な視点では〈行き違い〉という〈こと〉でとらえられるのではないか。評論の世界で〈異和〉で終わってしまうところから小説の世界は〈行き違い〉は復活させるようにおもえる。現実の行き違いが〈異和〉であるなら話はそこで終わってしまうが、〈行き違い〉はすべてのこと始まりではないのか。ギリシア悲劇もシェイクスピア悲劇も歌舞伎の悲劇も〈行き違い〉から始まるのではないのか。

〈異和〉だけでは、どうしても理解できない島尾の作品というものがある。

「僕がどんなに人なつっこくても、貝殻たちは固く蓋を閉じてしまふ。そして黒や白のいぼいぼの背中を押し並べて、残丘からその傾斜にかけて、くつついていた。貝殻の家の中の営みはそれぞれに重量を持つていたのであるのに、中の灯りはみんな下の方を向かってたよりの気な幅の狭い光を投げかけていた。僕の手許にはどんな光も届いて来ない。僕は自分の居場所の位地の高さで、それだけの悲しみを食べ、涙を落した」（『宿定め』一九五〇年一月「近代文学」）この作品からは存在の（いきちがい）を感じる。ここには〈異和〉というものは無い。異和があるから人間は悲しくなるのではなく、（いきちがい）があるから悲しいのだとおもう。感受性の違いかもしれないが、吉本は「この涙は他者にとってはどうしようもなく唐突だ。このところがこの作品の難解さのかなめになっている。「僕の落した涙は、ただ存在自体から（物理的）に溢れてきているとしか思えない」という。そして、「じぶんの生理的な（自然）そのものが、異変において孤独だから」と自然科学的な解釈を付け加える。私の認識では、悲しみとは（愛するものと愛されるものとのいきちがい）（生と死のいきちがい）（書く自分と書かれる自分とのいきちがい）等々であると思われるのである。ところが、島尾の小説では〈行き違い〉のこの運びを〈異和〉の空間に読者を解き放つ一瞬がある。それは島尾の小説の罨でもあり、読者はそれまでのなめらかな日常ストーリーからストップモーションに瞬間じ込められてから異空間に放り出される感覚になる。

「石像歩きたす」という一九四六年二九歳の短編を読んでみると、荒削りではあるが一瞬閉じ込められた異空間から次の展開が見えてくる。自己分裂がはじまるのだ。しかしそれは細胞分裂のようにではなく、見る自分とみられる自分の（いきちがい）として発生する。

「それは一つの方向ばかりではなしにいちどに四方八方手がつけられぬ工会に空気が割れた。私はその瞬間身体つきを猫のように地にはわせて空を見上げた。その格好はちょうど兵隊が不慮の兆候に対して状況判断する時の物なれた格好に似ていた。それは恐

てカメラマンの真実は遠近法をぶつ潰すことだ。つまり書くことにおいても撮影することにおいても切り取るということは遠近法を覆すことだ。遠近法は空間の物語だから。この手法は現実のような私小説に見せかける虚構「死の棘」で実験されて完成されてゆく。

高台のアスファルトの道を歩いてゆくと、二つの頭が物質としてくつついて一つの大きな石像に変わってゆく。二つの物質の一つはツラであり、もう一つの物質はオマダということだ。そこにス（酢）の匂いがしてきて、ふたつをくつつける。石像サカノウエタムラマルは「つら・おま・す」という。この不思議な感触は何だろと思う。物語にはない、あるいは、物語に消されることのない現実感というものだろう。滑稽だがここにはある暗示が潜んでいるように思える。島尾敏雄によると妻のミホが発作に襲われる時、それは神がかりになることかもしれないが、発作の前に彼女の顔に石の仮面のような表情がはじまり、そして爆発する。小説を読み書きする世界は彼女の治療法になるが、「石像歩きたす」を書いた島尾敏雄にも同じ素地があることがうかがえる。

現実の〈行き違い〉が〈異和〉となつて行き詰まり、死の様相を帯びてくる。すると幽体離脱現象のようにもう一人の自分が現れてくる。島尾敏雄は妻ミホの中に同じ〈資質〉をみつめており二人は普通の夫婦関係より強烈な関係をつ結んでいる。その〈資質〉を共有する島尾敏雄も同じ病理で書くことの中で神がかりになっていく。書くことは狂うことだともいえる。

吉本隆明は評論家としてモノ的に存在するものとして〈異和〉を観察する。モノ的に認識する吉本の文章は流れるようには書かれていない。したがって読者は彼の文章を方程式として読むしかない。それに対して島尾敏雄の文章は軽い流れの中に読者を引き込み、大海の限りなく遠くまで読者を運び去る。海まで運ばれた読者はいきなり打ち寄せてくる海の波に出会って永遠の宇宙に解き放たれて遊泳する。まるで胎内帰帰のようだ。

怖とか善悪の実感に先立ってそんな姿勢をとる習慣をつけられていたからだ。私は自分の姿勢にも過去の匂いが強くしみ込んでいたことをこげ臭く感じていた。そしてそんな姿勢の私の眼は真赤に焼けただれた空が一面に燃えているのを見た（中略）「私は海の方に逃げた。なぜ、海の方に逃げたのだろう。やがて私は海の上に浮かんでいた」

そこから再び平凡な日常に帰ってくる。「今、私は身体と離れた位置に、自分の紺サージの士官服と士官服をじつと見つめている眼を持つていた。」

すると、突然知らぬ男が「いつまでそんなもの着とるんかあ」とつかみかかる。しかし、誰もが沈黙して見て見ぬふりをして通り過ぎる。ところが、もう一人の男がハンマーを持つてやってくる。（見覚えのある男）自分がやられると思った瞬間、もう一人の男はしつこくついてきた男の頭の上にハンマーを打ちおろす。「しかし、ハンマーの男の眼は背中にもついていて」このハンマーの男の背中にも男の目が付いているということはどういうことだ。ハンマーの男は離れた位置から見つめる自分と見つめられる自分の（いきちがい）をさらに行き違う、自己分裂なのだろうか。酒場に入り座敷に上がる。

「そこにはむやみに自分を殺しく見下げはてた自分がいた。そこへハンマーを持った男が入ってくる。警察がやってきてハンマーの男は川に逃げ射殺された。橋の上から見物客が劇を見るように手をたたいている。」

「私は微熱の状態で、別のある高台のアスファルトの道を歩いていった」やがて、私の頭は二つに割れて、「そんなことではだめだ」という自分と「そのとおりで」という自分の自己分裂がはじまる。

この小説はすべて偶然の行き違いでできているが変にリアリティーがあり、作り話には思えない。なぜなら、総ての物語を作り話だといして偶然の行き違いが打ち砕いてゆくからだ。現実には物語なんてない。あるいは偶然と行き違いだけだ。われわれは物語よりこの偶然と行き違いのほうに現実を感じる。物語はつまりは作り話という嘘でしかない。島尾敏雄の小説はデタラメな日常を写真機のように切り取る。そし

そのような作品に「月下の渦潮」（一九四八年八月二一日刊「近代文学」三二歳時）がある。

「そして、その後に続く十六夜。以下の月々。とろりとした月下の海の羊羹のようなうねりの中では、あのように海水を巻き込む渦巻が巻いていている箇所がある。その渦に知らず知らず吸い寄せられていくような、そしてその渦潮の一番外側の土手の頂点に乗ってその次に来る傾斜にすべり巻き込まれる時のくらくらした三半規管がどうかしてしまふめくるめき、それが非常に誘惑的に浜小根に印象されていることを思った。そんな渦潮に普段は気がつかない」（小説最終部）

この羊羹のような風景は島尾の小説には何度も出てくる風景である。島尾がミホを連れて東京から奄美に戻るときにもこの風景は洋上の船からの状況として懐かしく現われる。そのようにして、島尾敏雄は〈異和〉から地球を裏返すような小説の航海に出ることが出来る。

「大海原のただ中に一個の人の智の限界が翻弄され、大きな揺れが彼女の肉体に響いてくると、妻は言いようのない陶酔を覚えるようであった。その場合私の方は多少船酔いのために悩んでいる方がよかつたようだ。すると妻は私を抱し始めたのだ。（中略）私たちは明らかに異なつた圏内に踏み込んだことを知らないわけにはいかない。それはからだ全体が（或いはここをゆきぶりがねぬほど）一種の違和の感じでしびれて来た。違和と言っても不快というのではなく、新しい場所に出て行くための晦冥の中のめくるめき酔いの気分近く、いわば私は脱皮したのであった。すでに私たちの選びとつた大洋の中の離れに島である小さな奄美大島が急速度に眼の前に大写しになって来た」（「妻への祈り」「婦人公論」一九五六年四〇歳時）

これらはまさに狂う島への接近である。

「作品…夜の匂い」に鳥尾は夢の中に予言を埋め込みようになる。〈異和〉は〈夢〉を生み〈夢〉は〈異和〉めいてくる。

こげた色の戦争があり、二ワトリを焼いたような臭いを放ちながらアメリカ兵の死体が開かぬバラシユートを機体からまかせて落ちてくる。これが鳥尾敏雄が見た唯一の戦死体かもしれない。このような敵機の墜落からはじまる「夜の匂い」(1952年4月に「群像」に三五歳時に発表された)作品では戦争期の〈行き違い〉に翻弄され、ついには戦局の行き違いのまま終戦を迎える鳥尾の〈異和〉が綴られている。それら行き違いの最高のことは死ななかつた戦後ということになるだろう。しかし、それらの行き違いが消えることを最後に書けなくなるわけではない。小説は事件によって展開することもあるが、もし日常が動かずに〈異和〉に沈んだら、動かぬ日常を夢に溶かして現実の偶然のごとく夢のごとく書くことができる。

小説「夜の匂い」は後半においてミホとの関係を怪しく予言する形になってゆく。

「木滋は二人の女の方を見た。背中にランプの明かりを受けて立った二人の女性の四本の足がレントゲン写真のようにすけて見えた。理恵の二本の足がやせて細く見えた。それは理恵には気が付かないことであつた。桂子を負ぶって歩き出すと理恵が縁側からはだして庭先にとびおりて、ぽつと白くほの浮いている浜木綿の群れのぼきぼき折って木滋への贈り物にした。桂子を負ぶって木滋の手はふさがっているの、それは桂子が持つことにした。

(中略)

木滋は理恵の不吉な狂乱の姿を妄想した。ユタ神に疲れた理恵が髪ふり乱して夜の浜辺を疾走しているように思えた」

理恵は小学校の先生で桂子はその生徒という状況設定である。おそらく、作家は恋愛対象の位相をおい過去にまでさかのぼって見極めようとしたのだろう。舞台は奄美であり、東京での修羅場はとつと過ぎて去った過去であるにもかかわらず、奄美の時代に戻って将来を予言する。なぜなら小説の時間設定では時間を飛び越えることができるからである。この小説をノンフィクションとして読むとおかしなこと



2017年10月21日神戸文学館で行われた「神戸から鳥尾敏雄を問うリレートーク」イベント。写真右から喜山莊一、高木敏克、前利潔、大橋愛由等

月暈とは淡い月の周りにできるフレアーのことらしい。鳥尾はそれをこの小説で象徴的に掌の動きで現わしている。同人誌の中の恋が淡い恋かもしれないし片思いの恋かもしれない。死の棘との関係が面白い。

夢屑一九八五年三月短編集六八歳時(死ぬ前の年)の作品は〈生と死〉の〈いきちがい〉の夢を表現している。

「私は撃たれてひっくり返った。おかしなまもちだが痛みはない。なお飽き足らぬと見た敵兵の一人が、剣で私の顔を剥ぎ、肺や心臓も摘出して解体したのだ。顔や内臓のない血だらけの死体の私は川に投げ込まれた。流れにつれ川は次第に大きくなり、私は岸にいた一人の男の方に流れ寄って行った。こんなおどろの姿ではきつと男は肝をつぶすにちがいないと思えたのに、持つていた竿で私を引き寄せようとするではないか。肥やしにするには汚いものほどこいなどと言っているのだ。私は上手くすり抜けて男の竿をのがれ、広い海に漂い出た」

ここには、さまざまな〈いきちがい〉の悲しみがある。まずは、何も相手に危害を加えようとしていないのに、軽々と殺されてしまう的と自分と相手との心の〈いきちがい〉。これだけで何と悲しいことか！これは、愛するものと愛されるものとの〈いきちがい〉の逆だ。憎む者と憎まれるものとの〈いきちがい〉。殺すものと殺されるものとの〈いきちがい〉そしてさらに悲しいのは死んでゆく自分

になる。フィクションだから結果の分かっていることを小説の世界では〈小説の今〉として書くこともできるのだ。〈小説の今〉は〈現実の今〉とは違うのである。予言が過去にさかのぼってなされるのは、現実ではない虚構の証拠である。

予言的作品「月暈」は目立つことなく潜んでいる。これは「死の棘」の〈恋愛地獄〉の作品を暗示的に予告しているといわれている。虚構の地上では天変地異が起こっている。

「おそらくSのせつちかち身勝手手の欲望からしつこくZ夫人に求め過ぎていることになっているので、Sの環境にそれだけの条件が熟している、Z夫人の側では他人ごとであることは充分考えられる。

(中略)

所詮禁止の林檍を食ってはまり込んだ意識の沼にさがっている人間の皮膚の繊細さが、もうどんなショックもその本来の強さが感じられずに、いつまでももの足りぬ弱さとしてしか感じられない。

(中略)

色彩もあると思えばありなと思えば、ない。その花にも色が付いていたが、それを言い現わすことは出来ない。そこにひよろつと小さな花が咲いていたことはSの心をやわらげる。金属的に堅く傾いている気持ちにほんのり生気を吹き込まれて、Sは思わず闇の中で微笑んだ。Sは両の掌でその花を囲うようにし、しかしその花びらにも茎にも手をふれずに、頬を掌で囲んだ花の方にすりよせるようにした。血の気を失い透き徹った皮膚の感じのその花びらに淡い匂いがあり唇を開いて待つようにも見える」

この文章は読む者の品格を映し出す鏡のようである。これをもって同人誌の仲間の淡い恋心と見るのか、不倫の証拠と見るのか？

この部分を吉本隆明が読み飛ばしていることには意味があると思う。ここには涙を落したことの意味のわからなかつた〈存在のいきちがい〉があつたのだ。(「品定め」1950年1月「近代文学」)

とそれを見ている自分との〈いきちがい〉死んでいく自分とそれを見届ける分裂したもう一人の自分との〈いきちがい〉。それらすべての〈いきちがい〉を何層にも重ねて、書く自分と書かれる自分が自己分裂してゆく小説家鳥尾敏雄の〈いきちがい〉悲しみ。死にゆく悲しみを抱えた人間の人生は泡沫のインテルメッツォにすぎない。総ては最後に行き違ふのだ。〈私〉は身体を持たない所在ないひとつの「眼」になっていきちがい宙をさまよう「悲しみ」なのだ。

蛇足になるが、神戸からの視点というのは、東京からの視点とも奄美からの視点とも位相が違うと思う。神戸からの視点ということは〈存在の行き違い〉によって生ずるもう一つの視点、つまり生きている自分から遊離して浮遊する作家の視点だとも思う。私にとつての神戸は虚構の町であり、神戸の魅力はその虚構性にある。私は無意識のうちにその虚構に酔い、中毒にかかっている。だからこそ神戸から出ようなどといったことも思つたことがない。神戸に土着性があるとしたら、夢の浮島ということだ。

高木敏克(たかぎ・としかつ)
小説家。第4回神戸文学賞授賞。2016年度神戸新聞文芸最優秀授賞。文学同人誌「漿」主宰(現在休刊中)著作に『暗箱の中のなめらかな回転』、『白い迷路から』ほか。「月刊神戸っ子」などの雑誌に執筆。芦屋大学講師、保険コンサルタント

